巻頭言

戦後七〇年、教化を考える

三原正資

戦後の日本を描いた小説家松本清張氏（一九〇九―一九九二）は『ゼロの焦点』の中で、登場人物に次のように語らせている。

「終戦後、もう十三年になりますが、十三年といいますと、〝十年ひとむかし〟の、ひとむかし以上になるわけです。もう十代の人など、終戦直後のことをよく知らないと思うんです。（略）」

とはいえ、私が一〇代になろうとしたその頃の日本はジョンソン基地（現在の自衛隊入間（いるま）基地）で米兵による日本人射殺事件等が起こり、いわば日本全体が今のオキナワだった。

のちに店頭に出たばかりの『マッカーサーの二千日』（袖井林次郎　中公文庫　昭和五一年）を読んだとき、戦後の日本を占領、統治した連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥（一八八〇―一九六四）に対して日本人が示した態度に驚ろいた。それから四〇年後の今もなお、そこに引用されたマッカーサーに送られた日本人の一通の手紙を忘れられない。

「元帥閣下及閣下の軍隊に最大の敬意を表します。日本は完全に敗れたのです。敗れた日本は今も世界中で一番

やばんな国でした。我等は只道義高い米国民によって浄化せられます。国民の不純な点を断乎清めて日本国民の大衆を救って下さい……閣下のあの切味のいいお仕事が日本国民大衆には神様の様に思はれます。　一日本人」

天皇に代わる〝神〟として、マッカーサーは日本に君臨した。戦後の日本はアメリカによって教化されたのである。

現在、私たちが占領時代の日本を見ることができる場所がある。在日米軍基地である。

それは意外なところにもあった。

平成二七年四月のある日のこと、六本木ヒルズから西麻布のレストランへ向かって歩いたとき、突然、私は延々と張られたフェンスを目にした。ハーディバラックス（HARDY BARRACKS）と呼ばれていた「六本木基地」だった。

U.S. Army Area／在日米陸軍地域／許可なき者立ち入り禁止／違反者は日本国法律により罰せられます。

此のゲートは非常用のみ／使用される／塞ぐべからず

この時代色を帯びた日本語の看板を見るだけでも、フェンスの前に立つ価値がある。

平成二七年六月、福生（ふっさ）市にある米空軍横田基地へ行った。私の印象は、フェンスの中にアメリカの小さな田舎町があると言えばよいだろうか。教会、映画館、学校……が映画撮影所のセットのように並ぶ。

ショッピングセンターへ行った。入り口にはピカピカのアメ車、入るとハーレーダヴィッドソンが展示されている。エスカレーターで２Ｆへいくと、米本国の食料、野菜が、３Ｆには衣料品が並ぶ。アメリカン・ライフが化石のように凝固した基地の街。

秋尾沙戸子さんの『ワシントンハイツ』（新潮社　二〇〇九年）によると、占領時代には、日本人が入ることができなかった地域（Area）にあふれたアメリカ文化に、日本人はあこがれをいだいたという。アメリカのファッションやミュージック、そしてライフ・スタイルはフェンスをこえて日本中へ浸透した。

七〇年後、日本人の多くは、米軍基地を「観光地」として受け入れているのではないか。横須賀はもとより基地の街を歩くと、ほのかな郷愁さえ感じる。基地は、戦後日本の母胎（Matrix）となった。一九七八年、日本に返還されたジョンソン基地の白いハウスの街並は、現在、〝ジョンソンタウン〟として、アメリカン・ライフを味わえる人気観光スポットになっている。

ところで、イタリア、アメリカでの生活が長い、マンガ『テルマエ・ロマエ』の作者ヤマザキマリさん（一九六七年生まれ）は、このような日本の在り方を積極的に評価する。

> 日本ではどんな食事の場でも取りあえず注文されるビールだが、イタリア人達はご飯の前に自分の国のもの以外の酒を飲むなんて考えられないらしい。基本的に食事の時のアルコールは食前食後を除いてワインで一貫していて、それ以外の飲み物では美味しく食事を頂けないと思い込んでいる。
>
> 酒だろうと食事だろうと、どこの国のものでも美味しければ受け入れようと思う日本人の寛容さは大きな美徳だと思う。（『望遠ニッポン見聞録』幻冬舎文庫　平成二七年）

この「日本人の寛容さ」「大きな美徳」がなかったら、一五〇〇年前に仏教を受容することもなく、今日、G7の地位を築くこともなかったにちがいない。

しかし、アメリカ文化には別の一面がある。サンフランシスコへ行ったときのこと、私は出発までの時間を利用して、名物のケーブルカーに乗ることができた。そのとき、私は、グリップマンがケーブルを操作する様子を見ながら、彼らが一〇〇年も前の古い機械を保存し活用する姿に敬意をいだいた。その姿は学問においては基礎研究を大切にする伝統に重なり、結果的には、例えばノーベル賞受賞者を輩出している。

なぜ、私たちは、アメリカ文化のこのような一面を学ぶことが少なかったのか。あの美しい原宿駅舎も建て変えられるという。同じことが、わが仏教についてもあてはまる。曲がり角にきた仏教の未来を、これからどのように構築したらよいのだろうか。私たちは、今一度、現在の仏教のあり方を検討してはどうか。ブッダと宗祖が目指したものに向き合う必要がある。

平成二三年一月、第二〇回教団論セミナーで講演されたケネス田中先生が紹介した、アメリカの俳優リチャード・ギアの仏教信仰のあり方は印象的だった。

リチャード・ギアも仏教徒で、最初は臨済宗から入ったのですけれども、そのあとダライラマと会って、今はチベット仏教徒となっています。（略）九・一一事件の数週間後、ニューヨークで追悼法要があったのです。遺族の方々がたくさん集まっています。そのときにギア氏は話の中で、彼は、遺族の人たちが聞きたくないような話をするのです。それは何かというと、加害者たち、即ち、テロリストたちも業の結果を受けなければいけない。因果として、やったことに対して彼らは、悪い行いによって悪い果を得ることになるので、彼らに対してもわれわれは慈悲的な気持ちを持たなければいけないと言ったのですね。これは、仏教徒としては、当然そう思わざるをえないと思うのですが、そう思っていてもそのような場面では口に出さないのが普通でしょう。そうしたら、もちろん遺族の人たちはうれしくない。ブーイングを受けたのです。ブーイングを受けて、彼はステージから去ったのです。

（『「アメリカ仏教」を考える』日蓮宗現代宗教研究所編　日蓮宗新聞社　二〇一五年）

戦後、多くの日本人が米軍基地からもれてくるアメリカ文化にあこがれたように、仏教の教え、その教えに生きる人、そしてお寺にただよう仏教文化に人々が魅了されるということから、二一世紀の私たちの教化は始まることを、私たち自身あらためて覚悟しなければならない。